

# 月刊ウィーン

現地オリジナル取材と編集で  
ウィーンを伝える月刊情報紙  
創刊平成元年 創刊26年目  
創刊1989年 Nr.306

## GEKKAN-WIEN 2014年12月号



Diego Velázquez (1599-1660) Prinz Baltasar Carlos zu Pferd 1635 Öl auf Leinwand, 209 x 173 © Madrid, Museo del Prado

ウィーン美術史博物館 特別展『ベラスケス』 2015年2月15日まで開催



# 杉本純の原子力の話II ウィーンと京都 39



十一月十七日〜十九日にかけて、日韓の原子力学会熱流動部会の共催により、原子炉熱流動と安全に関する日韓シンポジウムが韓国の扶余(プヨ)で開催された。世界の原子力設計と建設を主導する日韓二国が安全を強化することにより原子力システム

の性能向上に貢献することが目的である。一九九八年の韓国プサンでの第一回以来、福岡、キョンジュ、札幌、チェジュ、沖繩、チュンチョン、別府と二年毎に本シンポジウムを開催してきた。最新の技術的情報を交換するばかりでなく、近隣諸国からの参加も得て、技術的な質の高さと参加者数の両面で成功を収めてきた。会場には、韓国計ら三〇〇名、我が国から四五名、計一八五名の参加があり、招待講演二件、パネル討論、基調講演六件、および二のセッションより構成された。京大からは功刀教授、筆者および留学生二名が参加した。

若手への技術継承のためのシンポジウムが本会号前週の十五〜十六日に慶州(ギョンジュ)で開催された。筆者は講師として三十名の日韓学生に対してシビアアクシデント現象論に関する講演を行った。扶余での本会台でも卒業した学生



が実施したシビアアクシデント関連実験の結果を発表した。いづれも聴衆から質問があるなど反響があったのは嬉しかった。部長長としてレセプションで挨拶をするなど晴れがましい場面もあったが、現在韓国で教授を務めているかつての原子力機構炉心損傷安全研究室の仲間二人と再会できたことが個人的な特記事項である。慶州は朝鮮古代の新羅の都であり、扶余は同じく高句麗の都なので、紅葉が美しい両古都の類似点や違いを会議の合間に見ることができたのも幸運だった。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市の年末年始の恒例の暖かい飲み物について述べたい。ウィーンでは十二月に入ると市庁舎、シェーンブルン宮殿、シュテファン寺院などの前に華やかなクリスマス市が立つ。クリスマス飾りやクリスマスプレゼントを売る屋台やグリューワインなどの暖かい飲み物、焼き栗等の飲食物の屋台も並ぶ。グリューワインは赤ワインを温めてシナモンの香りがつけがされたもので、甘みのあるホットワインであるが、ウィーンではブッシュというブランドーに果物の汁や砂糖などを加えた飲み物がポピュラーである。グリューワインやブ

シュを飲むカップは、市ごとにデザインが異なり、返せば返金してくれるが、記念せとして持ち帰っても良い。一方、京都で年末年始に暖まる飲料としては、大晦日に除夜の鐘が突ける永観堂、知恩院、壬生寺等で甘酒の接待がある。元日からの初詣では、上賀茂神社を始め、下賀茂神社、粟田神社、三千院など有名な神社や寺院で初詣客に甘酒の接待がある。無料の接待でなくとも北野天満宮の山門前などの甘酒は美味しさと評判である。寒い所を長時間待った参拝後の暖かい甘酒は有り難い。変わったところでは、年末の南座での歌舞伎の吉例顔見世興行では開演前に舞妓さんが抹茶を振る舞うとくれる。少々待っても良い。両市は、盆地に囲まれているため、冬寒く暖かい飲み物がピッタリであり、市民や観光客に受けていることが共通している。



余談であるが、筆者はウィーン赴任中、クリスマス市に立ち寄って、暖かいグリューワインをよく飲んだ。京都では、平成二四年暮の吉例顔見世興行で抹茶を楽しんだ。両市の年末の暖かい飲み物に接することができた幸運に感謝しつつ、クリスマス期に明かりが点されるグラーベン通りの夜景を描いたスケッチを掲載させていただく。

■杉本純 京都大学教授  
元原子力機構ウィーン事務所長 ■